

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20695

研究課題名（和文）幼児の話合い活動の過程と交渉技術の発達についての包括的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Negotiation Processes and Skill Development by Kindergarten Children

研究代表者

宮城 信（MIYAGI, SHIN）

富山大学・学術研究部教育学系・准教授

研究者番号：20534134

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教育関係者や研究者向けに幼児の話合い活動の記録をコーパスとして整備し、その資料を基に幼児の話合いにおける相互交渉方略の解明と発達に関する実証的研究を行った。調査協力校の協力を得て、「行事についての話し合い」と「お話タイム」の2つの場面を対象に、各21会話、計42会話（11時間）を収録した。収録された21会話のうち、質や公開に伴う問題から10会話を選定し、幼児の会話のテキスト化を進めながら並行して分析を行った。また、協力校でのフォローアップインタビューも実施した。結果として、各年度で論文を提出し、代表・分担者で論文発表7本、研究発表3本の成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、合意形成などの話し合い活動の萌芽が幼稚園段階に見られると考え、研究に着手した点である。研究を行うにあたり、話し合い活動コーパスを構築した。なお、本コーパスは、全発話のテキストデータ、語彙表、発話時間、一部の補足情報などが施されており、言語研究に耐えうるものとして設計されている。

また、社会的意義としては、情報の共有が難しいとされてきた、幼稚園での話し合い活動を、教育関係者や研究者が利用可能になるように整備した点にある。また、プラットフォームとして、国立国語研究所に協力を得ている点でも、公開の透明性、ユーザーの利便性という点で、インパクトが大きい。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed a corpus of recorded discussion activities among young children for use by educators and researchers. Using this material, we conducted empirical research to elucidate and understand the strategies of mutual interaction and development in young children's discussions. With the cooperation of participating schools, we recorded two scenarios: "discussions about events" and "storytime," resulting in a total of 42 conversations (11 hours) comprising 21 conversations for each scenario. Out of the 21 recorded conversations, 10 were selected based on quality and issues related to public release. These conversations were transcribed and analyzed concurrently. Additionally, follow-up interviews were conducted at the participating schools. As a result, we submitted papers each year and achieved seven published papers and three research presentations by the principal and co-researchers.

研究分野：日本語学（言語発達）

キーワード：幼児の話合い活動 話し合い活動コーパス 合意形成 話し言葉の実証的研究 話し言葉の発達過程

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究ではこれまであまり取り上げられてこなかった幼稚園における幼児の話合い活動に着目する。先行研究では、小学校における教師の介入を含む児童生徒の相互交渉方略に着目した研究が進められている。しかし児童の社会的コミュニケーション能力の発達に強く影響を与える、就学前の幼児の話合い場面の言語実態を調査した研究は少なく、記録資料も共有化されていない。

研究を始めるにあたって、対象データの問題がある。幼児の会話を記録したデータは、ほぼ公開されておらず、あったとしても多くは母子会話などの少人数かつ私的場面の会話であり、幼稚園などの公的場面における幼児の話合い活動のデータは管見の限り存在しない。そのため、公開を前提に幼稚園児の話合いの場の記録を収集しコーパス化することが急務であると考えた。

2019年度から代表者が協力園で園児らの話合いの場の観察と記録を続けており、素材はあること、園からの積極的支援が得られていること、またそろそろあとどのくらい申請者らはコーパス構築の経験が豊かであることから、コーパスの構築が可能であると判断した。

そこで本研究では、映像を含む幼児の話合い活動の記録をコーパスとして整備し、それに基づき幼児の話合いの場における相互交渉方略の解明と発達に関する実証的研究を実施する。

2. 研究の目的

(研究の概要)

本研究では、幼児(ほとんどの場合、幼稚園に通園する幼児が対象となる。)の話し合い活動に焦点を当て、その相互交渉方略の解明と発達に関する実証的研究を実施した。本研究の成果物として、実際の映像を含む、テキスト化された会話の記録をメインとした、幼児の話し合い活動の記録をコーパスとして整備を進めた。このコーパスは将来的に、研究・教育資源として公開される予定である。

幼児の話し合い活動に絞って収録したため、収録場面はある程度限定される。代表的な収録場面は以下のようなものである。

行事についての話し合い: 幼稚園で行われる行事に幼児がどのように参画するかを、教師のアドバイスを受けながら話し合う活動。例として、遠足、子ども祭の出し物、記念写真を撮る場所、グループ名決めなど。

お話タイム: 降園前の時間に今日1日の出来事を車座になって幼児同士で報告する会。1日の活動を振り返る反省会として機能している。

これらの資料に基づいて、以下の観点を探求課題として、幼児らのコミュニケーション方略の研究分析を進めた。

- ・話し合い活動を通して、幼児ら個人内での意見の変化の可視化
- ・幼児同士が合意形成に至るまで方略の解明
- ・幼児らの話し合いに指導者の教員がどのように介入するのかの実態と効果

3. 研究の方法

調査資料は、「行事についての話し合い」と「お話タイム」の2つの場面を対象に各21会話、計42会話を対象としている。

この資料には、発話をテキスト化したデータや、別途語彙表が用意されている。

分析は、以下の3つの観点から進められた。

(1) 語彙・表現レベルでの分析(文献) など):

本研究では、幼児個人や、場合によっては教員の発話を取り上げ、使用語彙・表現を分析した。特徴的な語彙使用に加え、幼児への返答時に、応答表現の選択に大人を対象とする場合とは異なる傾向が確認された。作成した語彙表を日常話し言葉コーパスのそれと比較して、幼児の使用語彙の独自性を解明することができる。

(2) 対話レベルでの分析やり取り(文献)):

本研究では、主に隣接する発話、一連の発話を対象とした分析を行った。幼児の話し合いの展開は2、3回の短いやり取りで完結する(一区切りされる)場合が多く、分析単位としては妥当な範囲であると考えられる。

年中組(4歳児)の幼児頃からは、相手の発話に言及する返答が見られ、年長組(5歳児)頃になると一部の幼児から、相手への気遣いや承認を意識した発話が見られるようになる。この頃から、本資料においても、相手意識の萌芽が見られることが確認された。

なお、特徴的な幼児の発話としては、3、4と発話が連なると、途中で内容が拡散したり、話題が変更されたりといった様子が観察された。ワーキングメモリ不足の問題など結論を意識せず

に印象で話し始めることに問題があると推察される。

(3) 行動観察レベルでの分析(文献):

本研究では、やりとりや話し合いの状況からの影響を前提とした包括的な分析を実施した。書く発話の一まとまり性を意識して、当該の発話が、発話者にとってどのような意味や目的を持つものかに着目した。

また、発達段階を意識して模倣や役になりきるといった心理についても考察の対象とした。分析をまとめる際には、必要に応じてその場を設定した大人(保護者や教師など)にフォローアップインタビューを実施している。

(4) 本研究の分析における特記事項

分析においては、特殊な環境下にある話し合いであることへの注意も必要である。公的な話し合いの場(幼稚園)では、日常の目的のない自由な話し合いとは異なる。幼児らに、目的意識があることにも注意が必要で、話し合いの進行を促したり、相手を承認したり(形式的な場合もある)する言語行動が観察されることもある。

資料の分析において、必要に応じ絵フォローアップインタビューを実施している。調査協力幼稚園が附属学校であるため、教員、保護者を含めて極めて協力的な環境にあった。同園の教師らから、どのような場面において話し合いに介入するかなどのインタビューを収集しており、より精密な分析に活用する予定である。

本調査・研究は、研究者各々の所属機関(富山大学・国立国語研究所)において研究倫理審査を受けている。

4. 研究成果

(1) コーパスの整備と分析

(コーパスの構築)(文献 など)

本科で対象とした「話し合い」場面 21 会話のうち、収録データの質や公開に伴う問題から 10 会話を選定した。これには教員が主導する会話や、幼児自身で進める会話も含まれている。コーパスは試用版が公開に向けて準備を進めている。

(収録内容)

調査は富山大学教育学部附属幼稚園の協力を得て、「行事についての話し合い」と「お話タイム」の 2 つの場面を対象に各 21 会話、計 42 会話(11 時間)を収録することができた。収録はコロナ禍の影響で中断しつつも長期にわたって断続的に行われた。この中から、教育・言語研究に資すると考えられる場面を選定して、コーパス構築を推進した。

(研究成果)

幼児の話し合い活動のデータを活用して、機械解析による語彙リストや、プロトコルデータの使用版を整備した。それらを元に、連携研究者を含めて、分析を進めた。研究成果は、学会発表や国立国語研究所定例のシンポジウム、各学会誌などに継続的に発表されている。本研究の共同研究者も、毎年何かの研究成果を公表し続けて、実績を積み重ねている。

(収録データの質と量に関する課題)

話し合い活動による合意形成の資料の質は十分に基準を満たす(幼児の話し合いデータの公開としてはおそらく初の試み)ものであるが、個別の研究課題によっては、十分量に達していない可能性がある。今後継続的に、データの補完が必要となる場合がある。分析を進めつつ、今後の課題としたい。

(2) 個別の研究成果

個別の研究成果の一覧は、以下の研究業績を参照されたい。以下、代表的な成果をいくつか取り上げ、概要を示す。

() 発話順番取得のストラテジー(文献): 話し合い活動における発話順番取得のストラテジーに関する予備的考察を実施した。幼児が相手意識を持ち、順番取得の方略を身につけつつある姿が確認された。

() 応答表現の分析(文献): 幼児と大学生の応答表現について収集したデータから分析を進めた。広義の応答表現にはさまざまなパターンがあり、聞き手(大学生)が幼児であることを意識して応答表現を変化させることが確認された。

() ごっこ遊びの発話の分析(文献): 幼児の発話は、大人の発話と表現や目的が大きく異なる場合がある。ごっこ遊びは、子ども方略や話し合いの嚆矢と見ることでもできる。

() 話し合いの方略と意見の受け継ぎ(文献): 子どもの話し合いのプロトコルを分析することで、促しや意見の受け継ぎ、反対意見を述べるときなどさまざまな場面において、配慮に基づく方略が見られることを指摘した。それらを前提として、発達段階にある幼児の発話にその萌芽を見出そうという試みである。

(3) 研究成果の概略

これらの研究から得られた主な成果は、以下の通りである。

- ・使用語彙の選択傾向：幼児との会話においては、大人は独特の表現や応答を選択する傾向が確認された。
- ・合意形成の方略の解明：幼児同士が合意形成に至るまでの方略を分析した。
- ・幼児の意見の変化の可視化：話し合い活動を通じて、幼児個人内での意見の変化を観察し、その過程を可視化した。

また、資料の分析を進めていく過程で、幼児の話し合い活動について、以下のような注意点が明らかとなった。

(特殊な環境における話し合い活動について)

- ・幼稚園という特殊な環境での話し合い活動は、参加した幼児に積極的に話し合いに参加することを促すものだが、そのため、別途構築中の日常会話コーパスに収録される学校外での日常場面での会話例と比較すると、それらとは異なる点があることも明らかとなった。
- ・幼稚園内での話し合い活動では、決められた時間内で合意に到達できるよう、参加者の幼児らの士気も高く、手際よく話し合いが進んでいく様が見られた。脱線も少なく、発達段階に即した話し合いの方略を捉える適正なデータが得られた。

(4) 今後の展望

典型的な話し合いの方略だけでなく、「ごっこ遊び」のような発達段階特有の会話にも観察の幅を広げる必要がある。

本研究に関わる研究業績は、以下のとおりである。以下、代表・共同研究者によるものをリスト化した。これ以外にも研究協力者による分析が進められており、本資料の研究資源としての有効性が確認された。

【論文業績】

(2020年度)

小磯花絵・居關友里子・柏野和佳子・角田ゆかり・田中弥生・宮城信(2020)「子どもの会話コーパスの構築に向けて」『言語資源活用ワークショップ2020 発表論文集』5、pp.157-163、国立国語研究所

宮城信(2021)「幼児との会話における「代弁」的確認要求表現の効果」『富山大学日本文学研究』増刊1、pp.14-22、富山大学日本文学研究学会

(2021年度)

居關友里子・小磯花絵(2021)「幼児の発話順番取得のストラテジーに関する予備的考察：園児の話し合い活動の事例分析から」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』6、pp.171-177、国立国語研究所

宮城信(2022)「幼児との会話における応答表現の使用：聞き手の意識と応答表現の選択傾向に着目して」『富山大学国語教育』45、pp.23-37、富山大学国語教育学会

(2022年度)

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・藤越・西川賢哉(2023)「『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』1、pp.103-108、国立国語研究所

小磯花絵・居關友里子(2023)「幼児と保護者によるごっこ遊びの相互行為：日常場面に関する知識の利用に着目して」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』1、pp.253-261、国立国語研究所

(2023年度)

宮城信(2024)「教室での話し合い進行の分析」『富山大学日本文学研究』12、pp.39-52、富山大学日本文学研究

【発表業績】

(2020年度)

居關友里子・小磯花絵(2021)「幼児の発話順番取得のストラテジーに関する予備的考察：園児の話し合い活動の事例分析から」(言語資源活用ワークショップ2021)

宮城信(2021)「授業における児童の話し合い活動の目的」(『日常会話コーパス』VIII(招待講演)、国語研共同研究プロジェクト)

(2023年度)

宮城信(2024)「子どもの話し合い過程の分析-発話の受け継ぎと変更-」『シンポジウム「日常会話コーパス」IX、国語研共同研究プロジェクト)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 宮城 信	4. 巻 12
2. 論文標題 教室での話し合い進行の分析	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 富山大学日本文学研究	6. 最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・藤越・西川賢哉	4. 巻 1
2. 論文標題 『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『言語資源ワークショップ発表論文集』	6. 最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小磯花絵・居關友里子	4. 巻 1
2. 論文標題 幼児と保護者によるごっこ遊びの相互行為 日常場面に関する知識の利用に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『言語資源ワークショップ発表論文集』	6. 最初と最後の頁 253-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮城 信	4. 巻 45
2. 論文標題 幼児との会話における応答表現の使用：聞き手の意識と応答表現の選択傾向に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 富山大学国語教育学会『富山大学国語教育』	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 居關 友里子・小磯 花絵	4. 巻 6
2. 論文標題 幼児の発話順番取得のストラテジーに関する予備的考察：園児の話し合い活動の事例分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立国語研究所『言語資源活用ワークショップ発表論文集』	6. 最初と最後の頁 171-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小磯花絵・居關友里子・柏野和佳子・角田ゆかり・田中弥生・宮城信	4. 巻 5
2. 論文標題 子どもの会話コーパスの構築に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語資源活用ワークショップ2020発表論文集	6. 最初と最後の頁 157-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮城信	4. 巻 増刊1
2. 論文標題 幼児との会話における「代弁」的確認要求表現の効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 富山大学日本文学研究	6. 最初と最後の頁 14-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 授業における児童の話し合い活動の目的
3. 学会等名 『日常会話コーパス』VIII（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 居關 友里子・小磯 花絵
2. 発表標題 幼児の発話順番取得のストラテジーに関する予備的考察：園児の話し合い活動の事例分析から
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小磯花絵・居關友里子・柏野和佳子・角田ゆかり・田中弥生・宮城信
2. 発表標題 子どもの会話コーパスの構築に向けて
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ2020
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小磯 花絵 (KOISO HANAE) (30312200)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・音声言語研究領域・教授 (62618)	
研究分担者	居關 友里子 (ISEKI YURIKO) (70780500)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・音声言語研究領域・プロジェクト非常勤研究員 (62618)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------